

『魔女の宅急便』の最後のセリフを引用して終わることにしたい。

「お父さん、お母さん

お元気ですか。わたしもジジもとても元気です。仕事の方もなんとか軌道にのって、少し自信がついたみたい。落ち込むこともあるけれど、私、この町が好きです。」

引用文献

- 早瀬晋三. 2007. 『戦争の記憶を歩く—東南アジアのいま』岩波書店.
市川健二郎. 1987. 『日本占領下タイの抗日運動—自由タイの指導者たち』勁草書房.
宮崎駿監督. 1989. 『魔女の宅急便』スタジオジブリ.
読売新聞社. 1980. 『昭和史の天皇 9』.

ブータンにおける古道の現代的活用とその可能性

—Shingtala Kezang エコトレイルを事例に—

菊川翔太*

はじめに

2022年9月から1ヵ月間、ヒマラヤの南麓に位置するブータン王国（以下、ブータン）に滞在した。首都のティンブーから車で2日離れた東部の村に滞在した。滞在の目的は、大学院での研究テーマを探ることだった。滞在先の村では農家でホームステイをし、仏教の儀礼に参加したり、農業を手伝ったり、村人に簡単な聞き取り調査をしたりしていた。

滞在も終盤に近づいた9月末のある日、地方都市タシガン（Trashigang）に用事があり行くことになった。午前中の作業が終わり、午後からは住宅街の観察のためひとりで

散歩にでかけた。15分ほど散策していると、少し前の坂から一本の道が山の方まで続いているのが見えた。その道のスタート地点まで向かった。“Shingtala Kezang Eco-trail”というエコトレイルであった。

その頃、慣れない異国の地での暮らしから早く日本に帰りたいと思うようになっていた。言語も通じない、研究テーマも見つからない。滞在先の農家や周囲の方からお世話になっているのに何もできない自分の未熟さを痛感していた。気持ちをリフレッシュしなかったからか、その道に引き寄せられるように登った。

1時間弱のトレイルはブータンでの日々を

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

振り返る機会になった。登り終わると、プータンに居ること、プータンで研究できていることそのありがたみを再認識していた。自然に囲まれその土地の歴史や文化が刻まれたトレイルがもつ可能性を感じ、本トレイルについて調べていくことにした。

2023 年春の再渡航の際に、本トレイルを管轄しているタシガン森林局の局長と担当者の方にインタビュー調査を実施した。本稿は、そのインタビュー内容および、本トレイルに関する新聞記事の内容をもとに作成した。

まず、本トレイルのルート、歴史、2022 年のエコトレイルとしての整備を中心にその概要をまとめる。次に本トレイルの活用例として、2022 年 10 月に実施された Walk For Health プログラムについて紹介する。最後にプータンにおける古道の現代的活用の可能性について述べる。

Shingtala Kezang エコトレイルの概要

本トレイルは、地方都市タシガンから隣接するサムカル村 (Samkhar) までを結ぶ

3.4 km の道である。以下では私の経験をもとにそのルートを説明する。スタート地点から進むとすぐに急な上り坂となった。そこから数分登るとパッと視界が開けてタシガン市街を一望できた。小学校や病院、裁判所、タシガン県庁が見渡せた。

ここから少し進むと、10 本程度ダルシン (Dharshing) が立ち並んでいるのが見えてきた。ダルシンは、地面に垂直に建てられた木の竿に布がつけられたもので、チベット仏教の経典が書かれている。このダルシンにはどのような祈りが込められているのだろうか。ダルシンの向かい側に設置されている休憩所で足を休めた。休憩所から進み標高 1,220 m 程度まで緩やかに登ると、ヒマラヤ松の森に差し掛かった。木々の合間からヒマラヤのダイナミックな景観が見える。改めて自分がプータンに居ることを実感した。その森を抜けると、次第に緑豊かな亜熱帯の森に入った。人里から離れた静かな場所であり、鳥のさえずりが聞こえてきた。

この地帯は 60 種類以上の鳥類、37 種類以



写真 1 Shingtala Kezang のスタート地点

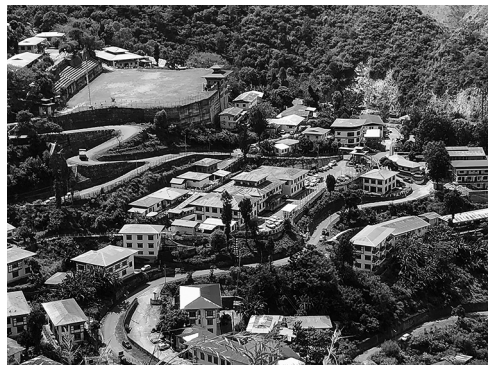


写真 2 タシガン市街の風景

上の蝶、ランゲールやサル、イノシシなど多様な動植物の生息地となっている [Nenten Dorji 2022]。亜熱帯の森を進むと、小さな溪谷が見えてきた。溪谷の底に着くと小川が流れていて、冷やとした空気が肌に触れた。小川を渡ると道は平坦になった。1時間ほど歩きTシャツは汗でびしょりだった。しばらく歩くとサムカル村の集落が見えてきた。もうすぐ終点だ。最後に平坦の道を早足で駆けると終点のサムカル村の仏塔、ジャンチュウブ・チョルテン (*Jangchub chorten*) に辿り着いた。トレイルを登りきった解放感と程よい疲労感から心も体もリフレッシュされた。

以上のルートは、かつてから古道として利用されてきた道である。本トレイル名はサムカル村最後のコチェイ (*khochey*)、Shingtala Kezang にちなんでいる [Trashigang Divisional Forest Office 2022]。ちなみにコチェイとは、1651年にブータンが統一される以前、ブータン東部の地域を支配していた地方首長の子孫のことである。

古道として利用されてきたのは、サムカル村からタシガンに至る自動車道が開通するまでであった。自動車道の開通以降は、草が生い茂り利用されなくなっていた。その後、2022年7月にタシガン県森林局のもと、エコトレイルとして整備された。タシガン県森林局での聞き取りによると、本トレイルを整備した目的は以下の3点であった。

1点目は、タシガン住民へリラクゼーションの場を提供することである。ブータンでは2020年からの新型コロナウイルスの感染拡

大によりロックダウンが2度実施された。コロナ禍を経て外出の機会を求めてトレッキングやハイキングに行く人が増えた。市街地に建物が密集しているタシガンでも、住民へトレッキングの場を提供するため本トレイルが整備された。

2点目は、サムカル村の住民へ利益を生むことである。サムカル村の住民は、本トレイルで移動すると30分でタシガンに辿り着ける。そのため、タシガンで役所、銀行、病院、商店などに用事がある際には自動車道よりもショートカットのコースとなる。実際に9月に登った際も、少数ではあったが本トレイルを利用する方が見られた。

3点目に、森林火災やごみ問題への意識を喚起することである。2022年にエコトレイルとして整備された際、スタート地点の看板、森林火災の啓発の看板、休憩所、ごみ箱などが設置された。森林火災の啓発の看板は、森林火災への意識を高めるため設置された。また、ブータンではスナックやペットボトルなどのゴミが道端に捨てられているケースが散見されるが、本トレイルではゴミ箱が



写真3 Walk For Health プログラムの様子
(タシガン県森林局提供)

利用されていた。森林局への聞き取りによると、“eco-trail”としての計画からそうした看板やごみ箱を設置したとのことであった。ちなみにこの整備は、タシガン県森林局が主導し、Vanishing Treasure, Bhutan Tiger Center, Department of Forest and Park Services からの資金援助により実施された。費用は約 20 万ニュルタム（日本円で 30 万円相当）だった。整備はタシガン県森林局が主導で行なったが、現在の管理はサムカル村のコミュニティフォレストのグループが担っている。

Walk For Health プログラム概要

つづいて、本トレイルの活用例として 2022 年 10 月 4 日に実施された Walk For Health プログラムを紹介する。本プログラムはタシガン県森林局に加え、タシガン県庁の各部局、タシガン病院などの協働プロジェクトとして実施された。タシガン県庁の全公務員の参加が求められ、実際に 100 名を超える公務員が参加した [Sonam Darjay 2022]。

本プログラムの目的は主に 3 点ある。1 点



写真 4 Walk For Health プログラムでの健康診断
(タシガン県森林局提供)

目に、本トレイルの宣伝および利用促進のため実施された。2 点目に、公務員間の部局を超えた交流を図るためである。タシガン県庁の公務員は普段の業務は各部局に分かれており部局をまたぐ交流が少なかった。3 点目に、参加者への健康への意識を高めることである。タシガン市街地は斜面に立地しており運動やリラクゼーションの場所がほとんどない。また、タシガンを含めブータンでは糖尿病や、高血圧、肥満などの生活習慣病が増加している。そのため参加者の健康への意識を高めるため、ゴール地点でタシガン病院の医師による健康診断が行なわれた。

おわりに

本稿では、ブータン東部タシガン県にある Shingtala Kezang エコトレイルの概要および活用事例について整理した。

本トレイルはかつてから利用されてきた古道を 2022 年にエコトレイルとして整備したものであった。トレイル周辺は多様な動植物の生息地であり、道沿いには経文旗のダルシンや仏塔のチョルテンが見られる。現在はリラクゼーションの場や市街地への近道となっており、環境保全に関する看板も設置されている。また利用者の心身の健康向上を目指した Walk For Health プログラムも実施されている。このようにトレイルの整備・活用に向けた取り組みが行なわれている。一方で、森林局の聞き取りからも、ゴミの回収や草むしりなどを含め今後誰がどのようにトレイルを管理していくかは課題があるとのことだった。

ブータンには本トレイル以外にも古道の活

用事例がみられる。たとえば、ブータン西部にあるタクツァン僧院は標高約 3,120 m にあるチベット仏教信仰の聖地であり、僧院までのルートは観光客やブータン人の巡礼路として活用されている [吉田・浅川 2016]。また、2022 年に整備された Trans Bhutan Trail は、西ブータンのハから東ブータンのタシガンまでの 403 km をつなぐ道であるが、このトレイルも 1960 年代にブータンの東西をつなぐ高速道路が建設されるまで巡礼路として利用されていた [Trans Bhutan Trail]。

古道の現代的活用の取り組みでは、豊かな自然とともにその土地の歴史や文化が刻まれた古道をいかに持続的に整備・活用するかが模索されている。ブータンの開発目標である国民総幸福 (GNH) の向上も、持続的な経済発展・文化の保全・自然環境の保護・良い統治を 4 本柱としている。日々の喧騒から

離れその土地の自然・歴史・文化が刻まれた古道を歩くことは、私たちに今ここにいることの価値や素朴な幸せをそっと教えてくれる気がする。Shingtala Kezang エコトレイルをはじめブータンにおける古道の現代的活用の今後に着目していきたい。

引用文献

- 吉田健人・浅川滋男. 2016. 「ブータンの崖寺と瞑想洞穴」『公立鳥取環境大学紀要』14: 51-70.
- Nenten Dorji. 2022. 〈<https://kuenselonline.com/eco-trail-in-trashigang/>〉 (2022 年 8 月 15 日)
- Sonam Darjay. 2022. 〈<https://theworldnews.net/bt-news/an-eco-trail-for-residents-in-trashigang-town>〉 (2022 年 10 月 3 日)
- Trans Bhutan Trail. 〈<https://www.transbhutantrail.com/>〉 (最終閲覧日 2023 年 5 月 31 日)
- Trashigang Divisional Forest Office. 2022. 〈<https://trashigangdfo.wordpress.com/2022/07/08/shingtala-kezung-eco-trail/>〉 (2022 年 7 月 8 日)

Hunter-animal Relationships Changed by Modern Hunting Technology

AKAOKA Yuji*

“We have caught a lot of animals today!”
A hunter in the village, shotgun in hand,
triumphantly holds up the day’s catch. Large

numbers of duiker (a type of ungulate) and
primate carcasses were randomly piled up on
the ground. This was a scene I saw every time

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University